

## 世界の中の旅人

―時雨沢恵一『キノの旅』における相対主義の問題―

國 部 友 弘

### はじめに

私たちは様々な思想や信念、価値観が絶対的な価値を失い、多様な視点の一つとして相対化されてしまうような社会を生きている。ジャン・フランソワ・リオタールが、現代社会（ポスト・モダン）の特徴として、思想や真理の正当性を保証する「大きな物語」の失効<sup>(1)</sup>を挙げたのもう四半世紀も前のことだが、リオタールの指摘はポスト・トゥルースといったことが語られる昨今においても、決して有効性を失ってはいない<sup>(2)</sup>。そのように相対主義的思考が広く一般化した現代社会において、人々はどのように生きていくのだろうか。

こうした問題意識のもと、本論は時雨沢恵一『キノの旅 the beautiful world』（電撃文庫、二〇〇〇・三）の読解を通じて、現代のポップカルチャー作品が、相対主義の問題にどのように向き合ってきたのかを明らかにすることを試みる。ここで分析の対象としてポッ

プカルチャーを選択するのは、ポップカルチャーが現代社会の相対主義的なあり方に、特に強く影響を受けていると思われるからである。従来のポップカルチャー論においても、ポップカルチャーは現代社会を反映したものとして繰り返し扱われてきた。ただし本論の目的は、ポップカルチャーを通じて社会を知ることではなく、相対主義的な社会における生の可能性をポップカルチャーがどのように提示しているのかを明らかにすることである。そのためには、ポップカルチャーをたんに現代社会の相対主義的なあり方を反映したものとして見るのではなく、相対主義的な社会が抱える問題に対する、一種の反応・応答として捉えることが必要である<sup>(3)</sup>。

多彩なポップカルチャー作品の中でも『キノの旅』を扱うのは、この作品が旅という主題を通じて相対主義の問題を中心に扱っているからである。二〇〇〇年に第一巻が刊行され、二〇二一年の現在もシリーズを継続している人気ライトノベル作品である『キノの旅』は、

旅を通じて触れる様々な価値観を、徹底的に相対的なものとして描いている。その相対主義的な認識において、人々の生の可能性はどのようなものとして示されているのだろうか。このことを明らかにすることは、私たちが相対主義的な社会とどのように向き合っていくのかを考えるための手がかりとなるのではないだろうか。

### 一、旅人と住人

『キノの旅』は、主人公であるキノが、言葉を喋る二輪車のエルメスと、様々な国を旅する物語である。第一巻のプロローグで、キノはエルメスに対して、旅をする理由について次のように述べている。

「ボクはね、たまに自分がどうしようもない、愚かで矮小な奴ではないか？ ものすごく汚い人間ではないか？ なぜだかよく分からないけど、そう感じる時があるんだ。そうとしか思えない時があるんだ……。でもそんな時は必ず、それ以外のもの、たとえば世界とか、他の人間の生き方とか、全てが美しく、すてきなもののように感じるんだ。とても、愛しく思えるんだよ……。ボクは、それらをもっともっと知りたくて、そのために旅をしているような気がする」  
（第一巻プロローグ「森の中で・b」）

キノは、「汚い」自分に対して、「美しい」世界や、その世界にいる他の人々を対置する。世界の美しさは、作品の副題（『The beautiful

world』）にもなっており、『キノの旅』において重要な意味を持っている。しかしその美しさの内実は、決して単純なものではない。『キノの旅』では、自己の利益のために他者を騙し殺すといった、一般的な美しさの観念からはかけ離れた行いをする人々が、数多く描かれている。そのような人々の生き方も含めて、キノは「全てが美しく」感じられると述べているのだ。『キノの旅』における世界の美しさは、美しくないものの美しさという矛盾をはらんだものとなっている。このことは、作品の冒頭に掲げられた、「世界は美しくなんか無い。そしてそれ故に、美しい」という言葉にも明確に示されている。

この矛盾した美しさを、どのように説明できるだろうか。ここでもまず強調すべきは、世界の美しさが自分の汚さと対立するものとして語られているということだ。世界の美しさの内実は、世界と自己の二項対立の構造において捉えられなければならない。そして世界と自己の対立は、『キノの旅』において「住人」と「旅人」の対立として描かれている。

キノが旅する世界は、各地に点在する数多くの都市国家から成っている。それぞれの国は文明の水準も様々であり、原始的な国が存在する一方で、すべての労働が機械化されているような高度な科学技術を持つ国も存在している。また、それぞれの国は独特の法や制度を持ち、そこで暮らす「住人」たちも、国ごとに独自の価値観を有している。『キノの旅』において、それぞれの国の「住人」はそれぞれの国の価値観を示す存在になっている。

これに対して「旅人」であるキノは様々な国を訪れ、そこに三日間だけ滞在する。その目的は「観光」すなわち様々な国の文化や人々に触れることである。ただしキノは旅先で見聞きする様々な価値観を正しいものとして肯定することもなければ、それらを異なる価値観から否定することもない。キノは特定の価値観が絶対的に正しいという考えを退けている。こうしたキノの立場を「相対主義」と呼ぶことができる<sup>(4)</sup>。

たとえば、第一巻第六話「平和な国」では、戦争による自国民の犠牲をなくすために、戦争をする代わりに「タタタ人」という未開の部族の人々を虐殺し、その殺害数を競い合う二つの国が描かれる。虐殺は「人間が本来持つ競争心や、敵愾心、残忍さを上手く発散」させ、これによって二国間の戦争がなくなったのだと、住人は説明する。「もしタタタ人の犠牲を認めず、再び両国が昔の戦争を繰り返すことになれば、犠牲者の数はタタタ人のそれとはまったく比べ物にならない」として、住人はこの虐殺を正当化している。

このような住人に対して、キノは「答めていないし、怒っていないし、呆れてもいなかった」と語られる。キノは虐殺の説明を「ただ聞いて」「ボクには分かりません。今のあなた方が間違っているのか、それとも昔の人々が正しかったのか」と話す。キノは死者数を減らすために虐殺を肯定する考えを絶対的に正しいとは考えないが、虐殺を無条件に否定する考えが絶対的に正しいとも考えない。

第四巻第三話「二人の国」では、「愛し合う二人の間には遠慮があ

るべきではない」という価値観に基づき「配偶者に対しては、殺人以外は一切罪にならない」という法を持った国が描かれる。そこでキノは、夫からの暴力に苦しむ女性から夫の殺害を依頼されるが、「ボクは、神様にはなりたくないんです」と述べ、これを断る。そして、「この国のことは、この国で解決するしかない。旅人が何を言ってもやっても、それが自分たちのルールだと言われればそれまでだ」というエルメスの言葉に、キノは同意する。

第一巻第二話「多数決の国」では、多数決による決定を絶対的な正義と考えて少数派を死刑にしていた結果、住人が一人になってしまった国をキノが訪れる。そこでキノは最後の住人の男から、多数決こそが「人が歩むべき、そして致命的な間違いを起こさない唯一の道」ではないかと問われる。これに対してキノは、「もしボクとエルメスが『それは違う。あなたは間違っていますよ』って言ったら、どうします?」と応答する。キノは特定の価値観から多数決の正しさを否定するのではなく、多数決の論理の自己矛盾を暴くことによって、多数決が絶対的に正しいという考えを退ける。

キノは旅の中で何度も、このような相対主義的な態度を示している。『キノの旅』には、特定の価値観を正しいと信じる「住人」と、それらの価値観を相対的なものとして捉える「旅人」キノという対立が、繰り返し描かれている。

『キノの旅』は一般的に、特定の価値観を絶対化しないことを肯定的に描いた作品として理解されている。たとえば久米依子は『キノの

「旅」について、「諸制度に囚われない自由な立場のキノ」が、「旅する先で様々な国の歪みを発見し、問い直していく」物語として整理し、「新たな物語世界を開いてみせた」と評価している。<sup>(5)</sup>ここでは、国の制度や価値観に囚われた「住人」に対して、そうした制度や価値観の絶対性を疑うキノが「自由」な存在として肯定的に捉えられている。

しかし、そのような理解は、先に確認した第一巻プロローグにおけるキノの言葉を見落としてしまっている。キノはそこで自分と世界を対置させ、「汚い」自分に対して「美しい」世界の方を肯定していた。この対立を「旅人」と「住人」の対立に重ねれば、キノは制度に囚われた「他の人間の生き方」を美しいものとして称揚し、相対主義的な態度を示す自分を矮小なものとして否定していることになるだろう。『キノの旅』は相対主義的な姿勢を単純に肯定するのではなく、むしろその立場が抱える一つの困難を描き出している。それはどのような困難か。なぜ「住人」は美しく、「旅人」は汚いものとされるのだろうか。その判断の根拠は、作品の中で明確に説明されているわけではない。しかしキノの自己のあり方を分析することで、この「旅人」が抱える問題を明らかにすることができるだろう。

## 二、旅人の空虚な自己

第一巻第五話「大人の国」は、キノが旅人になる以前の話であり、キノが旅人になるきっかけとなった事件を描いている。この話においてキノは、生まれた国で暮らす十一歳の少女であり、キノという名前

とは別の名前で呼ばれている。後にキノとなるこの少女は、あるときキノと名乗る旅人の青年と出会う。

少女が生まれた国は、『キノの旅』の他の様々な国と同様に、独特の制度を有している。それは、住人は十二歳になるときに「手術」をして、「大人」にならなければならないというきまりである。この国において、「大人」とは、仕事をする人のことであり、「仕事とは生きるために必要な、人生で最も重要なこと」である。それゆえ仕事は、「たとえそれがやりたくない行動でも、間違っていると思うことでも、絶対にやらなければならない」。この国の住人たちは、十二歳になると「頭を開けてその中の子供を取り出す」手術を行うことで、住人たちは「一晩ですっかり大人になり、「いやなことでも何でもできるような」る。

ここで語られる「大人」は、前節で見えてきたような、特定の価値観を内面化した「住人」と重なり合う。「大人」になることは、仕事がいちばん重要であるという価値観を内面化・絶対化することなのである。その意味で、「大人」は「旅人」と対立する存在といえる。少女は、キノと名乗る青年に対して「キノは大人なの？」と尋ね、青年は「キミの言うところの大人では、たぶん全然ない」と答える。青年は、特定の価値観を絶対化した「大人」では「全然ない」のである。価値観を相対化する「旅人」であることは、「大人」になることの不可能性と密接に結びついている。

それでは、「旅人」は「子供」と同一視されるのだろうか。「じゃあ

子供？」と少女に問われた青年は、「キミの言うところの子供でもないと思う」と答えている。そして、「大人でもなくて子供でもない」とすると「キノは一体何なの？」という問いに対して、「ボクは『キノ』さ。キノって名前の男。それだけかな。そして旅をしている」と答える。

いまだ「手術」を受けていない「子供」は、「大人」のように仕事  
が最も重要だとする価値観を絶対化しているわけではない。しかし、  
少女の言う「子供」も、十二歳になると「大人」になることが正しい  
とする価値観を持っている。すなわち「子供」もまた「大人」と同じ  
く、国の価値観を内面化した「住人」であり、「旅人」である青年と  
は異なっているのである。

「大人」も「子供」も、特定の価値観との関係によって意味づけら  
れている。このことは、「大人」や「子供」といった規定に限られる  
ものではない。少女は青年に「キノは一体何なの？」と尋ねるが、そ  
のような問いの答えとなるような存在として規定されることは、特定  
の価値観を内面化することに結びついていて、したがって、「旅人」  
があらゆる価値観を相対化するならば、「旅人」は何者かであっては  
ならないだろう。だからこそ青年は、少女の「キノは一体何なの？」  
という問いに、「ボクは『キノ』さ」とだけ答えるのである。

何者かとして規定されることを否定するふるまいは、少女ではなく  
なり旅人となった後のキノにも見られる。キノは、〈大人／子供〉と  
いう規定だけでなく、〈男／女〉というジェンダー的な規定をも否定

している。キノは時に少年と見紛われるような女性性を感じさせない  
髪型や服装をしており、「ボク」という一人称を用いて話す。第一巻  
第四話「コロシアム」では、周囲の人間からの「坊や」や「嬢ちゃん」  
などといったジェンダー的な呼称で呼ばれることを拒み、かつてのキ  
ノを名乗る青年の言葉を繰り返すように、「ボクはキノです」と答え  
る。キノとなった少女は、男でも女でもない存在として自らを示すの  
である。<sup>(6)</sup>

このようなあり方も、「住人」とは対照的である。先に見た「平和  
の国」の、タタタ人を虐殺する国で暮らす女性性は、虐殺が正しいこと  
が分からないと話すキノに対して、キノが「もう少し年を取って」子  
供を宿して、その子のぬくもりを自分の中に感じた時に「この気持ち  
が理解できると語る。彼女にとって母であることは、子供の命を何よ  
りも大切にするとする」という価値観と結びついている。その価値観は、自  
民の命のために虐殺を肯定する国の制度と一致している。

「住人」と「旅人」の対立は、何者かとして規定されるものと、そ  
のような規定を逃れるものの対立として描かれている。ここで重要な  
ことは、キノも青年も〈大人／子供〉や〈男／女〉といった自己規定  
を無化したところで固有名を持ち出していることである。この固有  
名は、「大人」や「女」といった諸規定の束を指し示すものではない。  
この固有名は、「大人」でも「女」でもない、何者でもない空虚な自  
己を指し示している。

柄谷行人は固有名について、一般的性質に相当する「特殊性」から

は区別された個別性である「単独性」を指示するものであると論じている。<sup>(7)</sup>これに従えば、「住人」は「大人」や「女」といった特殊性としての自己を持つが、「旅人」であるキノや青年が名乗る固有名は、性質による規定から区別された個体、すなわち性質においては何者でもない単独性としての個体を意味している。価値観の相対化は「大人」や「女」といった自己規定を否定するが、それと同時に、何者でもない空虚な自己を発見することにつながっているのだ。

「旅人」は、大人であることも子供であることも、男であることも女であることも否定することができる。しかし「旅人」は、空虚な自己、単独性としての自己を否定することはできない。キノはキノであることを否定することはできないのである。相対主義的な態度を示す「旅人」は、その態度の裏側の面として相対化不可能な空虚な自己を見いだす。<sup>(8)</sup>このことは、『キノの旅』において描かれる、「旅人」の自己保存的なあり方と関係している。

### 三、生存と犠牲

『キノの旅』を象徴する道具の一つとして、「パスエイダー」と呼ばれる銃器を挙げることができる。キノはパスエイダーの達人として描かれており、旅の最中で危険な状況に陥った際にはこの銃を駆使し、時には容赦なく他人を殺すことで危地を脱していく。しかし、キノが特定の価値観、特定の正義に基づいて人を殺すことは決してない。キノが銃を人に向けるのは、自分の生命を守るためである。

たとえば第二巻第六話「帰郷」では、キノを知人と勘違いし、悪ぶりで銃を向けた男が、キノに射殺される。第五巻第四話「英雄達の国」では、住人たちが移住したことを知らず、国の跡地を守り続ける人々の攻撃を受け、キノはこれを撃退する。このようにキノはしばしば銃を用いて人を殺すが、それは特定の価値観から悪と判断されるからではなく、自分の命を守るためになされる。

命を守ることの重要性は、時には言葉にしてはつきりと語られる。たとえば第二巻第七話「本の国」では、作家になるために国を出て旅をしようとする男に対して、キノは「撃つときは、躊躇わないこと」、「自分が生き残ることを最優先に」することといった助言をする。また、第六巻第一話「彼女の旅」でも、旅で気をつけるべきことは何かと問われ、「命をなくさないこと」、「殺される前に殺すこと」と語っている。

キノが命を守ることを重視するのは、他のあらゆるものの価値を相対化するキノが、ただ一つ、この空虚な自己だけは相対化することができないからだ。「旅人」にとっては、空虚な自己だけが唯一絶対的な価値を持つ。<sup>(9)</sup>

この点に関しても、特定の価値を内面化した「住人」は、価値観を相対化する「旅人」とは対照的なあり方を示している。「住人」は様々な価値観を持つ。その価値観の中では、自分の命は必ずしも最も価値があるわけではない。それゆえ、「住人」は時に自らの価値観に基づき、自らの命をも犠牲にするのである。

第四卷第十話「橋の国」では、橋をつくることを自分たちの「使命」とした国の記録をキノが発見する。その記録には、橋の材料が足りなくなつたため、その国の人々が自ら命を絶ち、その骨を用いて橋を完成させたことが記されている。第三卷第一話「城壁のない国」の中で語られる、とある部族の族長の娘は、「もう一生子供が産めなくなつた」ことで、貴重な食糧などを分ける価値のないものとして「族長命令で、死ぬべきと決まつた」。そして、「彼女はそれを受け入れて、殺されて、埋められた」。第六卷第八話「祝福のつもり」では、貧しい家族のために自分の臓器を売り、さらに、それが原因ですぐに死んでしまうことを隠して、自分自身を奴隷として旅人に売つた少女が描かれる。第二卷第八話「優しい国」では、一月後に付近の山が噴火することを知つた国の住人たちが、国とともに亡びることを決め、国を「素敵なもの」として記憶してもらつたためにキノを盛大に歓迎する。

このように、『キノの旅』の「住人」たちは、自分が大切だと思ふもののために、自分の命をも犠牲にしうる存在として描かれている。価値観を相対化する「旅人」と、一つの価値観を内面化する「住人」という対立は、自分の生存を第一に考えるものと、自分を犠牲にしうるものの対立でもあるのだ。

こうした対立の様相を踏まえることで、『キノの旅』が提起する、相対主義的立場の問題を理解することができる。第一巻のプロローグにおいて、キノは「汚い」自己と「美しい」世界を対置させていた。旅を通じてキノが経験する世界は多様であり、特定の価値観から見

と世界のある部分は美しく、また別の部分はそうではないものとして感じられる。たとえば、家族のために自らを犠牲にする生き方は美しく感じられ、残忍さの発散のために力の弱い人々を虐殺する生き方は美しくないものとして感じられるかもしれない。しかし、ここでキノが言う世界の美しさとは、そのように世界の特定の一部分に備つたものではない。キノは「世界とか、他の人間の生き方とか、全てが美しく、すてきなもののように感じる」と述べているからだ。

重要なことは、自らを犠牲にする人々も虐殺を行う人々も、特定の価値観を内面化・絶対化することで世界に没入して生きており、自身の命よりも価値ある大切なものを持つことができているということだ。その価値観にしたがつて、「住人」は自分の生に没入して生きている。もしも世界のすべてが美しいのだとすれば、その美しさとはそのような「住人」たちの没入的な生き方の美しさに他ならない。

これに対して「旅人」であるキノは、世界の中のあらゆる価値観を相対化し、それらから距離をとつて生きている。キノは、世界の内部の特定の価値観から他の価値観を批判するのではなく、世界の外部とも言えるような超越的な場所から、世界の中のあらゆる価値観を相対化する。だからこそキノは、世界と自己の対立を想定することができる。そしてそこで「旅人」は、世界の内部の何事に対しても没入せず、ただ何者でもない空虚な自己の生にのみ価値を見いだす。そのような自己愛的な生き方こそが、キノによって「矮小」で「汚い」ものとして非難されているのである。

『キノの旅』は、人々が囚われている制度やイデオロギーに囚われない「旅人」の自由を肯定的に描いた作品ではない。自分は愚かで矮小な存在ではないかと語るキノの言葉は、価値観を相対化する「旅人」＝相対主義者の自己愛的な姿勢を批判的に浮かび上がらせている。<sup>(10)</sup>

ところで本論は、相対主義的な社会における主体の生の可能性をポップカルチャーがどのように提示してきたのかを明らかにすることを目的としていた。しかし、キノの言葉はそのような主体を「矮小」なものとして切り捨て、その生の可能性を否定しているようにも思われる。『キノの旅』は現代的な主体の可能性をただ否定しているだけなのだろうか。そこに別の可能性を見いだすことはできないだろうか。本論はこれまで、美しい世界と汚い自分というキノの言葉にしたがって、『キノの旅』の構造分析を行ってきた。しかし『キノの旅』において現代的主体の生の可能性を考えるために、いまやこの構造は脱構築されなければならない。『キノの旅』には、キノの言葉を裏切る側面があるからだ。

#### 四、他者の反復

本論はこれまで、キノが語る世界と自己の対立を、特定の価値観を内面化する「住人」と価値観を相対化する「旅人」の対立として捉えてきた。「住人」は自分が内面化した価値観のために時に自分の命をも犠牲にするが、「旅人」はただ空虚な自分だけに絶対的価値を見い

だす。しかし、この対立は揺るぎないものなのだろうか。「旅人」であるキノは、一貫して相対主義的でありえているだろうか。<sup>(11)</sup>

時系列としてはプロローグの直前に位置する第一巻エピローグの中で、二輪車のエルメスはキノに旅の理由を尋ねる。その際、エルメスは次のように話している。

「じゃあ、キノは？キノは、どうして旅を続けてるの？そりゃあ、帰るところがもうないのは分かるよ。でも何度も非道い目にあったり、殺されそうになったり、道中辛いこともたくさんあったと思う……。キノは、一つのところに落ち着こうとは思わない？キノほどのパースエイダーの腕なら、どこでも雇ってくれるよ。お師匠さんのところで生活するって方法もあった」

（第一巻エピローグ「森の中で・a」）

ここでエルメスが話すように、旅をすることは「何度も非道い目にあったり、殺されそうになったり」するような危険なことである。実際、キノは作中で繰り返し命を落としかねない危険な状況に陥っている。キノは自分の命を犠牲にしているわけではないが、自分の命を大きな危険に晒しているのである。そうだとすれば、キノは「自分が生き残ることを最優先に」はしていないことになる。キノは旅をすることを、生き残ることよりも優先しているのである。

この点についてさらに考えるために、キノが旅人になるきっかけと



なる事件を描いた第一巻第五話「大人の国」を、再度取り上げたい。この話の中で、キノと名乗る青年は少女のキノに対して、次のように語っている。

「ボクには『ちゃんとした大人』っていったい何なのか分からな  
い。いやなことができるのが『ちゃんとした大人』なのかな？  
いやなことを延々と続けて、それで人生楽しいんだろうか？そ  
れも手術で無理やりこしらえて……。ボクにはよく分からない  
いね」  
(第一巻第五話「大人の国」)

青年は「ちゃんとした大人」になることが唯一正しいことではないとして、少女の国の価値観を相対化する。それまで「大人になるのが一番いいことだと思っていた」少女のキノは、この青年の言葉を聞いて「大人」になることが「急に不自然に思えてしまった」。キノは旅人の青年を模倣し反復することで、「大人」になることを絶対的と考え、価値観を相対化しはじめている。

その後、キノは両親に「大人になるための手術を受けたくない」と告げる。しかし、国の価値観を絶対的なものと考えた両親は、キノの言葉に「完全にヒステリーを起こし」てキノを殺そうとする。青年はこれを制止しようとして、キノの両親に殺されてしまう。キノは青年の持ち物であった二輪車のエルメスに乗って、国から逃げ出す。

そして自分の名前を言おうとして、急にそれが、今の自分ではないような気がした。あの国で、何も悩まずにはしゃいでいた子供の私。十二歳になったら手術を受けて、『ちゃんとした大人』になると信じていた私。

そんな人間は、もうこの世に存在しなかった。

(第一巻第五話「大人の国」)

ここでキノはそれまでの自分の名前を「子供の私」、つまり国の価値観を絶対化した自己を象徴するものとして捉えている。その価値観を相対化した現在の自分は、別の名前を名乗らなければならない。このとき、キノは相対主義的思考の持ち主であった旅人の青年の名前を、自らのものにする。それは青年がこれまでの自分とは対照的な、価値観を相対化する「旅人」であったからに他ならない。

先に見たように、青年は「大人」でも「子供」でもない、性質的な同一性を持たない空虚な自己を示すものとして「キノ」という固有名を用いていた。しかし少女のキノは同一性から逃れる空虚な自己を、反復可能な同一性を持ったものとして対象化し、「キノ」という固有名を、この同一性を指示するものとして用いている。キノは「キノ」という固有名を非固有化している。キノは青年と同様に何者かであることを拒むが、それはキノが青年と同様に「キノ」であるからなのである。そこでは同一性を持たないというものの同一性、単独性の特殊性が反復されている。「旅人」の単独的な自己は、このように単独性

を特殊性として反復することで生成されている。

キノが「キノ」という名とともに反復するのは、相対主義的な考え方や、何者でもない空虚な自己のあり方だけではない。キノは青年がかつて乗っていた二輪車と同じ名前の二輪車に乗り、青年のコートを着て旅をする。キノの旅もまた、青年の旅の反復なのである。キノは「キノ」であるから何者かであることを拒み、「キノ」であるから旅をする。キノの相対主義的な思考が青年の反復としてなされている以上、キノはこの反復や、それにもなう旅という行為の価値を相対化することができない。これによって、キノは国の価値観を絶対化する「住人」と同様に、自らの命よりも大切なものを持つことになる。

ここにおいて、命よりも大切なものを持つ「住人」と生き残ることを最優先にする「旅人」という対立は解体される。キノが語るような、「汚い」自己と「美しい」世界の対立など存在しない。キノもまた他の「住人」と同様に、世界の中で懸命に生きる人々の中の一人なのである。そして『キノの旅』は、キノを含んだ世界のすべてを「美しい」ものとして肯定している。

### おわりに

『キノの旅』には特定の価値観を信じる「住人」と、諸価値を相対化する「旅人」という対立が語られている。このとき相対的認識の主体は、世界に没入せず空虚な自己にのみ関心を持つ「汚い」存在として否定されることになる。こうした構造によって、『キノの旅』は相

対主義的社会が抱える問題を批判的に抉り出している。

しかし他方で『キノの旅』は、この「住人」と「旅人」の対立構造の不可能性をも描いている。「住民」と「旅人」の対立は、特殊性としての自己と単独性としての自己の対立に重なるが、「キノ」という名をめぐる反復は、単独的な自己が特殊な自己として対象化される可能性を示している。また単独性を生み出すこの反復は、旅のような具体的な経験の価値を相対化不可能なものとして位置付けることになる。

こうした論理によって『キノの旅』は、自らが提起した相対主義的な主体の矮小さという問題を乗り越える可能性をも示唆している。この可能性は、相対主義的な認識によるニヒリズムが問題となる現代社会において自らの生を肯定するためにも、重要な意義を持つのではないだろうか。それが『キノの旅』から読み取ることができる問題提起である。

注1) ジャン＝フランソワ・リオタール、小林康夫訳『ポスト・モダンの条件 知・社会・言語ゲーム』水声社、一九八六・五。

(2) こうした状況を踏まえて、現代哲学では、相対主義を乗り越えようとする議論も盛んになっている。たとえば思弁的実在論や新しい存在論といった近年の实在論的思想は、相対主義的な認識を乗り越え、絶対的な事実・実在を探索するという特徴を共有している。本論の問題意識は、そのような議論とも並行している。

(3) こうした本論のスタンスに関しては、テリー・イーグルトンが「問題と解決」モデル」と呼ぶ文学の捉え方を参考にしてている。イーグル

トン、文学テクストや文学のジャンルとは、「外的歴史の反映」ではなく「現実の加工法」であり、「問題群に対する応答」なのだと言張している（大橋洋一訳『文学という出来事』平凡社、二〇一八・四）。

(4) ただしキノは、どのような価値観も絶対的なものではないといった相対主義的な認識を、言葉にして主張しているわけではない。野矢茂樹が指摘するように、相対主義をひとつの主張として語ることはパラドックスを生じさせるため、相対主義はただ示されることしかできない（『語りえぬものを語る』講談社、二〇一七）。

(5) 久米依子「少女少女の出会いとその陥穽―性制度の攪乱に向けて」『ライトノベル研究序説』一柳廣孝・久米依子編、青弓社、二〇〇九・四。

(6) 先に引用した久米依子も、キノに関して、制度からの逃走と、成長からの逃走、そして「性別未分化な生き方」の「符合」について言及している（前出「少女少女の出会いとその陥穽」）。

(7) 柄谷行人「探究Ⅱ」講談社学術文庫、一九九四・四。

(8) ここまでの議論を、デカルトのコギトと比較することもできるだろう。デカルトは、すべてが疑いうるとしても、そのように疑う自己は必然的に存在すると考えた。柄谷行人は、この懐疑は共同体の慣習への疑いでもあり、疑う主体とは共同体の外部の単独者であると述べている（『探究Ⅰ』講談社学術文庫、一九九二・三）。デカルトのコギトとは、共同体の価値観を相対化する空虚な形式としての「私」に他ならない。そして『方法序説』で述べられているように、デカルトもまた「旅」の経験を通じて、そのような懐疑を深めていた。

(9) 「旅人」が空虚な自己に価値を見いだすことから、「旅人」も「住人」と同じく一つの価値観を内面化していると言うことは、不可能ではない。しかしそれによって、キノによる自己と世界の対立を揺るがすことはできない。なぜならこの空虚な自己は諸価値を相対化する自己であり、諸価値に対してメタレベルに位置づけられるからである。入不二基義が『相対主義の極北』（ちくま学芸文庫、二〇〇九・一）で指摘するように、オブジェクトレベルの相対化とメタレベルの絶対化の両立は矛盾ではない。このメタレベルの特権化を批判するためには、形

式的な自己論駁の指摘よりも複雑な手続きが必要になるだろう。本論は第四節で、そうした批判を試みることになる。

(10) こうした批判を、現代社会においてしばしば指摘される、「セキユリティ」への関心の高まりとも関連させることができるだろう。東浩紀はポストモダン社会において、イデオロギーの領域が弱体化し、イデオロギーなしのセキユリティの暴走が生じてしまっていると指摘している（『情報自由論』情報環境論集 東浩紀コレクションS』講談社BOX、二〇〇七・八）。

(11) この問いについては、反対に、非相対主義者として定義される「住人」が、本当に非相対主義的であるかと問うこともできるだろう。たとえば、国とともに亡ぶことを選択する「優しい国」の住人の一人である老人は、かつて自分が旅をしていたとキノに語っている。だとすれば、彼はキノと同じように様々な国を見て、それぞれの国の価値観を相対化していたはずである。しかし、彼はそうした相対化の上で、かつての愛銃をキノに託し、この国とともに死ぬことを選択している。また同じ国の、キノが宿泊したホテルの支配人の女性は、国とともに死ぬという選択について、「旅人であるあなた方には、この行動が愚かに映るかもしれませんが」と、キノに宛てた遺書の中で述べている。彼女もまた、旅人の相対化する視線を理解した上で、自らの行動を決定している。このように「キノの旅」においては、すべての「住人」が自身の価値観を無条件に絶対化しているわけではない。一部の「住人」は、自身の価値観をある程度相対化しつつ、同時にこれを信じている。スラヴォイ・ジジエクは、イデオロギーとは「素朴な意識」ではなく、人々はそれを誤謬であると知りつつ従うと論じている（鈴木晶訳『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社、二〇〇〇・一二）。右のように、自身の価値観を相対化しつつ、これに没入する「住人」のあり方には、そのようなイデオロギーの複雑な働きを見ることができよう。